

西田幾多郎と無位真人の世界 — 後期ハイデガーの人間概念を背景として —

景山洋平

本発表では、死を目前に控えた西田幾多郎が鈴木大拙にあてた書簡で語られる人間概念に着目し、西田と大拙の関連著作にあらわれる「無位真人」のモチーフにそくしてこの人間観の特質を考察することで、世界哲学の中の西田幾多郎の意義を検討したい。その際、西田の人間観を際立たせる背景として、後期ハイデガーがロゴス概念とともに語る特異な人間概念を参照する。晩年の西田は、絶対矛盾的自己同一の論理を確立するのに相ともなって、それ以前からあった行為的直観としての人の概念をこの論理の不可分な契機として規定しなおす。しかも、この概念は、大拙の『臨濟録』解釈における無位真人に接続される。それゆえ、ここからひるがえって無位真人にそくして西田の人間観の特徴を直感化できる。さらに、この人間観を後期ハイデガーの人間概念と対比することで、広義の「事実性」から出発した20世紀の世界的な哲学運動における西田の位置を明らかにできる。